

## 「世界の中の日本語演習」における新たな取り組み

国語・国際理解・佐藤栄作

### 1. 授業の概要

#### 1. 1 授業の基本情報

「世界の中の日本語演習」(3年前期)は、国際理解教育コースの日本語学関係科目の最後に位置する。「日本語概説」(1年前期)、「日本語研究」(1年後期)、「日本語と日本事情」(2年後期)で、日本語の特徴を知り、母語を客観視することを学んだ学生が、学習成果を非日本語母語話者との関わりの中で役立てられるようになることを目標としている。本年度は16名登録(国際理解教育コース3回生14名、中国からの留学生2名)。なお次年度からは4年前期となる。

#### 1. 2 本年度授業概要

本年度は、「日本語らしさ」を夏目漱石の『坊っちゃん』とその翻訳で確認し、各自が最も興味関心を引かれる事項・事象を選び、それについて英語・中国語との比較を含めて分析・検討し、その成果を発表し、それについて受講生同士で議論した。

英訳本5種をそれぞれのグループの担当とし(中国人留学生2人は中国語訳2種を一人ずつ分担し)、訳本間の相違に特に注目しながら、翻訳しづらい日本語を実感した。

まず、「日本語と日本事情」で取り上げた「日本語らしさ」を思い出させ、翻訳不可能あるいは困難であると予想される事象を学生に挙げさせ、原則としてそこから、翻訳の比較へ進んだ。取り上げた事象は次の通り。

人称詞、ニックネーム、役割語(文末表現)、方言、オノマトペ、敬語、成句、言葉遊び、俳句

前半は、同じ事象を全体で調べて、比較一覧表を埋めるかたちで日本語と翻訳とを比較し、後半は、それぞれのグループが注目した事象について、発表するとともに、他の訳本でどうなっているか確認していった。

たとえば校長のニックネームである「たぬき」は、欧米には生息しておらず、「Badger(アナグマ)」などと翻訳するが、そもそも日

本語・日本文化における「(キツネとタヌキは動物として別格)人を化かす」という特徴を「badger」は有していないようだ。そういう確認・発見を繰り返しつつ、翻訳の困難さ、すなわち「日本語らしさ」「日本文化の特徴」を体感していった。

増山和恵氏がアメリカでの日本語学習教材として『坊っちゃん』を英訳(マンガで)しているが、その解説や挿絵も授業に有効だった。2人の留学生担当の中国語訳も、また英語と異なり、3言語・3文化の比較になり、面白かった。

### 2. 授業評価・授業研究

#### 2. 1 本年度の取り組み

昨年度までは、前年度の「日本語と日本事情」で学んだことの中から、各自が最も興味関心を持ったテーマについて、深めて発表するという形式をとってきたが、本年度は、アクティブラーニングと授業時間外学習を意識し、単に個々の課題を深める演習とはせず、グループによる発表形式を取った。『坊っちゃん』を取り上げたのも、時間外学習をより意識したことによる。

シラバスに『坊っちゃん』を事前に読んでおく」と明記した。次年度までに学んだ「日本語らしさ」を『坊っちゃん』の中で確認していくのであるが、授業開始までに、『坊っちゃん』を読んで来なければいけないようにしたのである。実際には、しっかり読んで来ていない受講生もいたが、次に、6つのグループ(2~3人)に分かれ、日本人の5グループに、それぞれ異なる英訳『坊っちゃん』を担当させた。どのグループの他のグループとは異なる本を持っているので、次の週に取り上げる事象の翻訳した部分を見つけて来なければ一覧表が抜けてしまうことになる。そして、後半はグループでの発表だから、その準備をしなければならなかった。

このように、時間外学習を行わざるを得な

い状況を作って授業を進めた。

## 2. 2 アンケート結果

教育コーディネーターが実施したDP対応の学生認識調査の結果を以下に挙げる。回答は11人だった。(横軸の1~4はそれぞれ1とてもそう思う、2ある程度そう思う、3あまりそう思わない、4DPと無関係)

	1	2	3	4
1A 教育に関する確かな知識	2	6	1	1
1B 自分の専門分野の知識	2	8	0	1
2A 教育をめぐる現代的課題	3	6	0	2
2B 教育の現代的課題への対応	2	4	1	3
3A 教育活動のための技能	1	8	1	1
3B 教育活動のための表現力	5	4	1	0
4A 自己の学習課題の明確化	2	8	1	0
4B 理論実践を結ぶ主体的学習	5	6	0	0
5A 専門職業人としての使命	5	5	0	1
5B 多世代への対人関係形成力	3	7	0	1

DPと無関係だったとする回答があったが、「教育についての現代的課題」については、この授業も日本語教育に関わるという意識を持たせるに至らなかったということを示している。しかし、「理論と実践を結ぶ主体的学習」、「教育活動のための表現力」などは、まずまずの回答が得られた。「とてもそう思う」がやや少ないが、本年度の取り組みの成果が少しは現れているように思う。

授業時間外学習調査の結果は、

30分	3名	
1時間	3名	
2時間	3名	
3時間	2名	平均1.5時間

この結果は、①私の他の授業に比べて多いこと、②今年度の授業の形態ならば30分は短すぎることを示している。つまり、取り組みはもくろみどおり授業時間外学習を増加させたが、理想的な授業はまだまだ実現できていないということになる。

## 3. 総括

本年度は、例年よりも、よりアクティブに、授業時間外学習が増えるように取り組んだ。そのことはそれなりに表れたと思う。

しかし、いい授業ができたかという、例

年の自分の授業よりはましなものになったということにすぎない。DP対応についても、この授業の関わりの深い項目については、もっと「とてもそう思う」が増えないと十分とはいえない。

授業時間外学習についても、今年度の授業形態なら、最低1時間は必要だと思われる。不十分だった理由としては、事前の日本語『坊っちゃん』の読み込みが不足していて、そこでの好奇心の高まりが不十分だった受講生がいたことが考えられる。そこがうまく機能していれば、授業担当者に言われる前に、分担した訳本で「あんな日本語、こんな日本語」がいったいどう英訳されているかと興味を持たないはずがないと思われる。もっと、自発的に、確認作業(抜き出し作業)ができたのではない。

なお、幸いなことに、参考にした英訳「マンガ『坊っちゃん』」の著者増山和恵氏が1月にサクラメント大学の学生とともに来松した。その際の交流活動への参加・協力を募ったところ、本授業は前期であったが、受講生の10人以上が参加してくれた。

実は、一昨年の夏、増山氏が来松したおりに、いずれ学生を連れて来たいというお話があったので、今年度の「世界の中の日本語演習」はそれを意識し、そういう場合に、松山について語れる、『坊っちゃん』について説明できる、英訳しにくい日本語についての知識がある、そんな国際理解教育コースの学生を育てたいという私の考えがあった。

学生は、『坊っちゃん』についての交流会の場で、積極的に発言してくれた。

シラバスに挙げたこの授業の到達目標は、ほぼ達成できたと思う。しかし、シラバスで挙げたDPは以下の二つであるが、

- ・現代の異文化理解のさまざまな課題について多様な視点から論じ、相手文化の立場に立って適切な対応を考えることができる。(思考・判断)

- ・欧米文化理解、日本アジア文化理解、日本語教育に関する自己の学習課題を明確にして、理論と実践を結びつけた主体的な学習ができる。(関心・意欲)

これでアンケートを取っても、「とてもそう思う」はまだ難しいと思われる。さらなる授業改善が必要だと自覚している。